

## 映像アーカイブの現状と意義 -人類の知的財産としての可能性-

[2013・FW] 21021014 櫻田健介

### 1. 研究の背景と意義

インターネットを通じ世界がつながるなかでコミュニケーションや情報伝達、そして情報の記録として映像が大きな可能性を見せている。デジタル化の流れに乗り、映像は多くがデジタルで記録されそしてデジタルで保存されるようになった。映像のもつ要素は多岐にわたるが、現在それを知的財産として後世に残していくという義務感的な意識は低く機関的な保存も十分にされていない。

現状ではテレビ局や国が主導する公共アーカイブなどの組織が映像の保存を行っており、デジタル化された映像の利用なども含め模索している。

グーグルは書籍などのコンテンツと同じように映像も世界的に集積する力を見せ、一方で著作者やコンテンツの有権者との間で衝突している。

本研究では映像自体の可能性、映像が集積され保存されることによりもつ可能性をその意義と共に明らかにする。

データとして映像を考えたときアーカイブは何ができるのかを考察し映像の集積のあり方とアーカイブの利用方法そしてそれらをどう守るかを提案する。

### 2. 研究目的・方法

本研究の目的は映像の価値とそれらがアーカイブ化されることで生じる新しい価値を現状の映像アーカイブの機関や取り組み、映像を取り巻く様々な変化を読み取る。

映像アーカイブに関わる問題や課題を研究し、また書物を代表とする他の知的財産として保存されているコンテンツと比較することでその課題を示し、最適な運用や未来の形を考察する。

研究方法としては先行事例を書籍や論文より参考としまた多種多様なアーカイブを調査、利用し参照する。

### 3. 研究結果・考察

19世紀末に誕生したとされる映像（動画）は娯楽として、文化、研究・歴史保存、情報として技術的に、そして何より知的財産としての価値があることが分かった。

また、アーカイブにおいては公共的なアーカイブ、放送局が主導するアーカイブが存在しそれぞれの特性を生かした価値創造と保存を行っていることが分かった。

デジタル化という大きな流れの変化のなかで映像をはじめ、ほとんどのメディアを同じデータとして扱うことが

可能となった。

アーカイブもそれに則した変化を余儀なくされている。

しかし、その利用は試行錯誤を重ねる段階であり、ビジネス的展開や情報としての展開にはまだまだ発展の余地がある。

また書籍との比較からグーグル問題が代表するようにデジタル化がもたらしたコンテンツの集積における課題があることが分かった。

そのなかで公共アーカイブだからこそできる、民間のアーカイブだからこそできる役割とそれぞれの特性を生かした可能性が明らかになった。

これらの研究から映像アーカイブのもつ可能性として公共的利用の促進による可能性、価値の変化を考えることができた。

またアーカイブが行える様々な面白い試みと利益につながるアーカイブの可能性を考察できた。

そしてデジタル化にともなう危機と変化を知ることによってデジタル化の開く映像アーカイブと映像利用の価値を明らかとなった。

### 4. 結論

デジタル化がもたらした変化により映像アーカイブも変化を余儀なくされ、集積の形を変え、公開をより自由なものとなった。

そのなかで明らかになったグーグル問題などの不安要素が存在すること、それにより公共的な取り組みの役割が映像アーカイブにおいても期待されている。

一方で放送局主導などのアーカイブはより簡潔により広い映像の集積と発信に力を入れていくべきだ。

また映像が消費者や個人のより身近であるモノとなったとき対応しなければならない問題が発生しているのも確かである。

知的財産として最も身近な情報として私たちの生活に入り込んだ映像は、保存され残していくべき最たる価値なのである。